

(5) 研究の考察

考察の視点

本研究では、学習状況調査の結果から見える課題の解決を目的として、生徒の実態を把握し、授業改善の手立てを講じた授業実践に取り組んできました。そこで、課題の解決に向けて必要な力として示した次の2点を視点に授業実践を考察します。

課題の解決に向けて必要な力

- ア もっている知識や調べて分かったことを活用して、社会的事象の意味、意義を多面的・多角的に考え、説明したり論述したりする力 【社会科における思考力・判断力・表現力】
- イ 基礎的・基本的な知識を身に付けながら、社会的事象の意味、意義を理解する力 【社会科における知識・理解】

ア もっている知識や調べて分かったことを活用して、社会的事象の意味、意義を多面的・多角的に考え、説明したり論述したりする力が付いてきているか。

考察の視点アについては、実践事例6（第3学年「人間の尊重と日本国憲法」）と実践事例2（第3学年「現代社会の見方や考え方『社会集団の中で生きる私たち』」）を例に考察します。

実践事例6は、我が国の政治が日本国憲法に基づいて行われていることの意義を考えさせることをねらい、「テレビや新聞などのマスメディアやインターネットによる報道は制限されるべきであるかどうか」という論題で、生徒に意思決定を迫りました

表1 実践事例6（第13時）のワークシートの分析結果 n=39

調べて分かったこと（概念）を活用している	46.2
学習した語句や用語を使っている	82.1

※数値は%で表示しています。

た（第13時）。もっている知識や調べて分かったことを活用していたかどうかは、第13時のワークシートの意思決定の理由についての記述に、学習した内容がどのように含まれていたかで分析しました。その結果、表1に示すように、単元で学習した語句や用語を使って理由を記述することができた生徒は、82.1%でした。また、調べて分かったこと（概念）を活用して記述することができた生徒は、46.2%にとどまりましたが、生徒が受けた県調査の評価の観点「思考・判断・表現」の正答率35.4と比較すると10.8ポイント上回っています。このことから、単元を通してもっている知識や調べて分かったことを活用する力が付いてきていると考えます。

社会的事象の意味、意義を多面的・多角的に考え、説明したり論述したりする力が付いてきているかについては、意思決定の理由に着目し、多面的に考えられているかを判断する目安は、複数の視点から記述できていること、多角的に考えられているかを判断する目安は、複数の立場から記述できていることとして分析しました。

理由は)
国にとって 有利な情報だけが公開されたりして、みんなが知らない所で、政治が進められたりしたらいけないし、やはり政治を進めるためには、様々な情報が必要だと思ったから。
 そして 国民には 知る権利や表現の自由などの権利がある、それを侵害してはいけないから。

資料1 抽出生徒Bの第13時の記述

例えば、資料1のように、抽出生徒Bは、前半の記述では、国の立場（枠囲み部）に立ち、情報公開の視点から、「知らないところで情報が公開されている」という国民が危惧すること（破線部）や「政治を進める上では必要である」という国政での必要性を記述しています。また、後半の記述では、国

民の立場（枠囲み部）から「人間らしく生きる権利（知る権利、表現の自由）」という基本的人権の尊重という視点から、侵害をしてはいけない（実線部）という理由を述べてきています。

このように、複数の立場、複数の視点から理由を記述できた生徒は、表2赤線枠囲み部で示すように、学級全体の71.7%でした。

これらのことから、生徒は、もっている知識や調べて分かったことを活用し、我が国の政治が日本国憲法に基づいて行われている意義について多面的・多角的に考え、「報道の制限」についての自分の考えを論述できてきたと考えます。

実践事例2（第3学年「現代社会の見方や考え方」）では、単元を通じた抽出生徒Cのワークシートの記述の変容を基に考察します。本単元は、単元を通して「修学旅行のバスの席順を決める」という事例を取り上げ、学習問題「わたしたちにとってきまりとは何だろう。」を追究する中で社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義について考えさせることをねらいました。

抽出生徒Cは、第1時の最初に、「きまりとは何か」について、資料2のように、「きまりは守るべきことであり、自由を制限するものである」と記述していました。しかし、第1時でのグループや学級での話し合いを受け、第1時の振り返りでは、資料3のように、「トラブルなどを防ぐため」や「社会集団で過ごすため」などを付加していました。これは、きまりがなぜあるのかという目的を追究しようとしている姿だと捉えます。

第2時は、効率と公正について体験的に学ぶ場として、バスの席順を「自由席にするか」「番号順など決められた席にするか」について、時間を制限して話し合わせました。その後の振り返りで、抽出生徒Cは、資料4のように、席順というきまりをつくることについて、「納得いく決め方といかない決め方がある」と記述しています。第3時では、席順の決定、採決について「どうすれば、みんなの納得が得られるか」を討論させました。討論後の振り返りでは、資料5のように、「全会一致が一番よい」としながらも、「無理だと思う」「改善できないか」

表2 実践事例6（第13時）のワークシートの分析結果 n=39

視点の数 立場の数	記述なし	1つ	2つ	3つ以上	合計
3つ以上	0	0	10.3	17.9	28.2
2つ	0	2.6	17.9	25.6	46.1
1つ	0	10.3	5.1	0	15.4
記述なし	10.3	0	0	0	10.3
合計	10.3	12.9	33.3	43.5	100

※数値は%で表示しています。

多面的に考えていると判断する目安：複数の視点（情報の確かさや人権尊重、知る権利など）から理由を記述している。

多角的に考えていると判断する目安：複数の立場（国や国民など）から理由を記述している。

・守るべきこと・自由の制限

資料2 抽出生徒Cの第1時の最初の記述

はじめは、自由を制限あるものかと思、たけど、トラブルなどを防ぐため、安全で安心して幸せを築くものかと思、いました。
社会集団で過ごすために、お互いへの配慮が必要と思うけど、それを従わなければいけないと思、いました。

資料3 抽出生徒Cの第1時の振り返りの記述

これは自由でいいけど、自由の納得いくものを、納得いかないものがありました。
男子の意見が印象的でした。

資料4 抽出生徒Cの第2時の振り返りの記述

多数決がいいかもしねないけど、それは自分の方が多数派だった場合で、少数派だった場合、自分は納得いくかたじかと思、った。
少数派の意見を尊重しつつ、改善して、いこうかと思、う。
全会一致が一番いいと思、ったけど、無理だと思、った。
もし10分間で自分から1の場合、圧力で、まわりの意見をかきつけて、まわりの意見から。

資料5 抽出生徒Cの第3時の振り返りの記述

と記述しています。

これらのことから、抽出生徒Cは、きまりをつくることについて、第2時で効率と公正を両立する難しさを体験し、第3時に「多数派だった場合」「少数派だった場合」「1人だった場合」など様々な立場に身を置いて考えている様子が見えます。

第4時では、様々な採決の仕方の長所や短所を調べさせ、再度、みんなの納得が得られる決め方について討論させました。その後、学習問題「わたしたちにとってきまりとは何だろう。」に立ち戻り、振り返らせた際、抽出生徒Cは、資料6のように、きまりとは、社会集団の中で、「うまく折り合いをつけ、協力しながら生きるために」あり、「互いを尊重し合い」「合意を形成し、作り直しながら生きる道を探す努力をするためにできる」とまとめています。さらに、単元の振り返りでは、資料7のように、「少しの我慢が必要不可欠だ」と感じ、「対立と合意、効率と公正をどのように使うのか」悩むと記述しています。

これらのことから、抽出生徒Cは、単元を通して「きまり」について、調べて分かったことを活用し、効率の良さや独りよがりにならない公正さなどの様々な視点から多面的に考え、関係する様々な立場に身を置いて多角的に考え、自分の考えとして表現することができたと捉えます。

以上のことから、生徒に、もっている知識や調べて分かったことを活用して、社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考え、説明したり論述したりする力が付いてきていると考えます。

イ 基礎的・基本的な知識を身に付けながら、社会的事象の意味、意義を理解する力が付いてきているか。

考察の視点イについては、実践事例4（第1学年「世界の諸地域～北アメリカ州～」）と実践事例3（第1学年「武家政権の成長と東アジア『武士の世の始まり』」）を例に考察します。

実践事例4は、大規模な農業や工業の発展を主題として追究する学習問題「北アメリカでは、どのような産業が盛んか調べよう」を基に、北アメリカ州の地域的特色を理解させ、その知識を身に付けさせることをねらいました。事例としてアメリカ合衆国を取り上げ、生徒が調べて分かったことを基に、アメリカ合衆国の特色を、第5時に資料8のようにまとめました。その後、第7時に学習問題Ⅱ（論題）「日本は、アメリカ型の

きまりとは、社会集団の中で、うまく折り合いをつけ、協力しながら生きるために、互いを尊重し合い、合意を形成し、作り直しながら生きる道を探す努力をするためにできるもの。

資料6 抽出生徒Cの第4時のきまりについてのまとめの記述

決まりを評価する視点の多項目を実現するために、それぞれ異なる価値観、少数派の意見を尊重し、対立と合意、効率と公正を共に考えることを理解し、それを活用していくことを考えることが大切だ。自分自身は、少しの我慢が必要不可欠だ。互いを尊重し、合意を形成し、作り直しながら生きる道を探す努力をするためにできる。そして、少しの我慢が必要不可欠だ。互いを尊重し、合意を形成し、作り直しながら生きる道を探す努力をするためにできる。

資料7 抽出生徒Cの第4時の単元の振り返りの記述

良い点	問題点
・広大な自然 ・大規模農業 → 安い価格 ・豊かな資源、労働力、技術 → 大量生産、大量消費 ・便利、快適な生活 ・経済発展 効率 快適 便利	・食の品質、安全 ・ごみの排出量が多い ・世界中へ輸出、影響 → 地域の良さがつくれる 品質安全 環境 地域の良さ

資料8 アメリカ合衆国の地域的特色をまとめた生徒のワークシートの記述

生活様式を、今後更に取り入れるべきか」に対する意思決定を迫りました。その際の意思決定の理由の記述について、単元を通して習得した知識や第5時にまとめたような、特色（概念）を活用して記述できていたかどうかを分析すると、表3のようになりました。資料9の抽出生徒Dのように、単元を通して習得した知識や概念を活用し記述できた生徒は、学級全体の84.2%でした。

表3 実践事例4のワークシートの分析結果 n=38

習得した知識や概念を活用している	84.2
簡潔な言葉でまとめている	86.8
上記の両方ができている	78.9

※数値は%で表示しています。

また、単元の学習を振り返らせ、北アメリカ州の地域的特色と日本とを対比させ、今後の日本の在り方について自分の考えを簡潔な言葉で表現させたところ、資料10の抽出生徒Eのように、日本の食生活(日本の伝統)と便利さ・快適さ(アメリカの合理主義)のバランスを図りながらも経済発展を続けることと考えたことを整理してまとめることができた生徒が、約86.8%でした。これらのことから、基礎的・基本的な知識や概念を身に付けながら、北アメリカ州の地域的特色についての理解が深まっていると考えます。

米の1あたりの金額がアメリカにくらべて日本が約7倍も高いのは、高すぎると思うし、ずいぶんこの金額で買いつけるのはつらいと思う。
 ・アメリカは多く新発明し、世界に影響を与えている。取り入れていいのは日本はおくれと思う。また、私は、快適でよりくらしやすい世の中にしたいため、アメリカの生活様式を取り入れていくべきだと思う。このことから私は賛成である。
 ・私たちが多く利用し、とても便利である。これは生活が楽になっていくかと思う。時間や金に余裕が生まれるものがある。便利だから利用しているわけであってそれは私たちに必要だからであることと表している。
 ・アメリカは多く輸入しているものは、日本でもとても必要なものであり、日本ではあまりとれていないものもある。輸入してはくるとおぼろげには困ると思う。いざはじめて食べなくてはならない。
 ママ

— … 単元を通して習得した知識や概念を活用したと判断した箇所
 資料9 抽出生徒Dの第7時の学習問題IIの意思決定の理由の記述

今後日本は、食生活を大切にすつても、便利で快適な世の中にし、経済発展を進めることを大切にすべきだと考えます。

資料10 抽出生徒Eの第7時の単元の振り返りの記述

実践事例3（第1学年「武家政権の成長と東アジア『武士の世の始まり』」）では、武家政治の特色について考えさせることを通して、武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が全国に広まったことを理解させることをねらいました。学習問題I「武士の世はどのようにして誕生したか」について追究させ、単元のまとめとして論争となっている歴史的事象である鎌倉幕府の成立を取り上げ、学習問題II「武家政権の成立は、いつか」について意思決定を迫りました。単元のまとめとなる第6時に、1192年説、1185年説、1221年説の中から選択させ、その理由を記述させました。抽出

私は、鎌倉幕府の成立は、(1221) 年だと考えます。
 理由 征夷大将軍になったのは1192年だけどまだ幕府は立ち立っていません。1221年にいたるまでに平氏を破ったり、荘園領主と地頭の決まり事を決めたりして鎌倉幕府が成立するための準備をして、やっと1221年に今までのことが報われて、幕府が成立できたと考えます。1221年に承久の乱で幕府が味方した東国は、ほぼすべての国です。西国はとこそ上皇に味方しなかったとこそあるので、東国と幕府の関係が深いところから武士も幕府を信頼しているので上皇に勝つ事ができ、西国を打ち倒すまでの力を得た1221年に立ち立って幕府が成立することができたと思います。

資料11 抽出生徒Fの第7時の単元の振り返りの記述

生徒Fの記述を見てみると、資料11のように、源平の争乱や荘園領主と地頭の取り締まり、承久の乱など武士の台頭してきた史実を根拠にしなが、自分の考えを述べていることができています。これは、単元で習得した知識を活用して、武家政権の成り立ちについて理解している姿だと捉えます。

これらのことから、生徒が基礎的・基本的な知識を身に付けながら、社会的事象の意味、意義について理解する力を付けていることがうかがえます。

以上のことから、学習状況調査の結果から見える課題を解決する授業改善策としての効果を確認することができました。